

## 2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふりがな 氏 名	ふじい しやうた 藤井 正太
(研究テーマ名) 近世中後期～明治・大正期京都の都市社会構造に関する研究—町共同体を軸に—	
(研究活動実績) <p>今年度は、上記研究テーマのもと、①明治後期～大正期における町共同体の再編、②近世中後期～近代初頭における町共同体と大店との関係、の 2 つの視点から研究を進め、その成果のとりまとめを行った。</p> <p>①では、有隣学区・塩竈町（現京都下京区）を素材に、近世以来の居付家持を中核とした強固な町共同体の構造が、明治地方自治体制や産業構造の変動などを経ながら再編されていく過程を検討した。具体的には 1897 年（明治 30）の各町を単位とする公同組合の設置を契機に、従来の町共同体が、行政に対応する「公」的領域と、神事や年中行事・慣習などの「私」的領域とに分離・再編されていく過程を、規約や財政の局面を軸に明らかにした。また、繊維関連業者（問屋）が集まる同町の住民構成・土地所有構成の検討により、近世～近代京都における西陣機業を基軸とする産業構造変化の一端にも言及した。</p> <p>②では、旧京都市中の中心部に位置する梅忠町（現京都市中京区）を素材に、近世中後期～近代初頭における町共同体の展開過程を、土地所有構造の局面から検討した。町規約の変更や災害（天明大火）などとの関係をふまえながら、18 世紀中に土地集積と不在地主化が一定程度進むという同町の特質を明らかにした。また、同町に居住する大店・永楽屋（細辻家）の存在に着目し、近世後期以降、同家が町内で突出した存在になる一方、町運営の局面では同家も他の居付家持と同様に町に包摂されていたことを明らかにした。このほか、町と個別家持の間や町内家持の間における融通・救済的な土地売買にくわえ、縁戚関係や商家経営体内部での土地譲渡・売買の実態も検討し、土地を基軸とした町内諸関係の解明も進めることができた。</p> <p>①・②は、いずれも投稿の準備を進め、次年度早期の発表を目指す。</p>	